

香川県西部地域における後期古墳の階層性と鉄鎌

乗松真也・中里伸明

はじめに

以前、乗松らは香川県西部地域（三豊平野・丸亀平野西部）を中心とした後期古墳の階層構造について分析を行った（信里・乗松2004）。その中で提示した鉄鎌の編年図に不備があったため、本稿ではその補足・修正を行い、さらに後期古墳の階層性のなかで鉄鎌がどう位置づけられたのか明らかにすることを目的とする。

なお、I、II-1・3、IIIは乗松、II-2は中里、それ以外は両者が執筆を行った。

I. 長頸式出現以降の鉄鎌の分類と編年

近年、地域単位で古墳時代の鉄鎌に関する研究が進んでいるが（註1）、本地域では古墳時代鉄鎌の基礎的な整理すら行われていない。そのため、ここでは香川県内の古墳出土資料を対象とした鉄鎌の分類と編年を行う。ここで分類・編年は、鉄鎌と後期古墳の階層性との関連性を検討するための前提作業であるため、後期古墳に副葬される鉄鎌の中で重要な位置を占める長頸式出現以降の鉄鎌を対象とする。

1. 分類

これまでの研究で様々な鉄鎌の分類案があるが、ここでは①「機能差」②「全体的なつくりの差」③「鎌身部形態」の3つのレベルで分類を行っている尾上1993を参考にし、本稿の目的である後期古墳出土鉄鎌の特質を明らかにすることに重点を置いた分類を行いたい。

まず、①のレベルでは平根系と尖根系に分類する。

平根系は②のレベルで無茎式と有茎平根式に分類し、無茎式は後期古墳からの出土数がわずかであるため細分しない。有茎平根式は③のレベルで腸抉柳葉式、長三角形式A、長三角形式B、圭頭式A、圭頭式B、方頭式に分類する。基本的には尾上1993に準ずるが、長三角形式は鎌身関部が直角になるものを長三角形式A、鈍角になるものを長三角形式Bとする。圭頭式は刃部先端が鈍角をなし、鎌身部側縁が直線的なものを圭頭式A、刃部先端の角度が圭頭式Aよりもやや小さく、ふくらが丸みを帯び、鎌身部側縁がやや内湾するものを圭頭式Bとする。長三角形式Bと圭頭式Bには近似性が認められる。

尖根系は②のレベルで長頸式と短頸式に分類するが、香川県内で短頸式は出土していないため、長頸式のみとなる。③のレベルでは、鎌身部の形態から腸抉柳葉式、柳葉式、三角形式、片刃式に分類する。さらに、鎌身部形態とは異なる属性であるが、独立片逆刺を有するものと、段違い逆刺（鈴木2003a）を有するものを設定する。

2. 編年と画期

（1）編年

無茎式 TK208型式併行期（以下～型式期と略する）からTK10型式期まで継続する。ただし資料数は少ない。

時期	無茎式	有茎平根式
TK 208 ↓ TK 23		腸抉柳葉式
TK 47		
MT 15		
TK 10 ↓ TK 43 ↓ TK 209		<p style="text-align: center;">長三角形式B</p> <p style="text-align: right;">(第2の画期)</p> <p>1 檻端2 2 川上 3 原間4 4・5 雄山7 6~9・11・12 浦山10 10 菊塚 13~16 岡田井4</p>

第1図 鉄鎌編年図1 (S = 1/4)

時期	長 頸 式				
TK 208 TK 23	独立片逆刺 17	段違い逆刺 18	腸抉柳葉式 19	柳葉式 20	片刃式 21
TK 47	22	23	24	25	三角形式
MT 15 (第2の画期)	26	27	28	29	片丸造
TK 10	26	27	30	31	32
TK 43 TK 209	26 王臺山 27~29 菊塚 30・31・33・34 母神山罐子塚 32 岡田井4	33	34		

第2図 鉄鎌編年図2 (S = 1/4)

有茎平根式 腸抉柳葉式がTK208型式期から認められ、TK209型式期まで継続する。その他の長三角形式A・B、圭頭式A・B、方頭式はTK10型式期に出現する。

長頸式 後期の主流をなすとされる長頸式は、香川県内ではTK208型式期に出現する。独立片逆刺を有するものは岡の御堂2号墳、末則1号墳で出土している。両古墳とも須恵器が出土していないため細かな時期比定は困難であるが、その他の出土遺物や周辺古墳との関係からTK208～TK47型式期の間に位置付けられる。段違い逆刺を有するものは、TK208型式期の川上古墳、城山1号墳で出現し、TK10型式期の王墓山古墳でも認められる。腸抉柳葉式はTK208型式期から認められ、TK10型式期まではほぼ同じ形態を示す。TK43型式期には、幅広でやや薄い鏃身部をもち、逆刺が外反する形態のもの（30・31）が母神山罐子塚古墳から出土している。この型式が19・23・27と直接的な系譜関係にあるとは考えにくいが、ここでは同様に腸抉柳葉式としておく。柳葉式も長頸式の出現期であるTK208型式期に出現し、TK209型式期まで存続する。TK10型式期の菊塚古墳では鏃身部が片丸造のもの（28）が認められる。TK43型式期の母神山罐子塚古墳では、鏃身部断面形が二等辺三角形に近い柳葉式（33）が出土しているが、この型式は片丸造の柳葉式の系譜上にあると考えられる。柳葉式に比べて鏃身部長が短いものを三角形式とする。三角形式はMT15～TK10型式期に認められる。片刃式はTK23型式期に出現し、TK43型式期まで継続して認められる。

（2）画期

対象とする時期の中では、2度の画期が認められる。第1の画期は長頸式の出現期（TK208型式期）であり、第2の画期は有茎平根式のバリエーションが増加するTK10型式期である。

II. 後期古墳に表された階層性

1. 古墳群内での副葬品組成と墳丘・主体部規模、立地との関連性

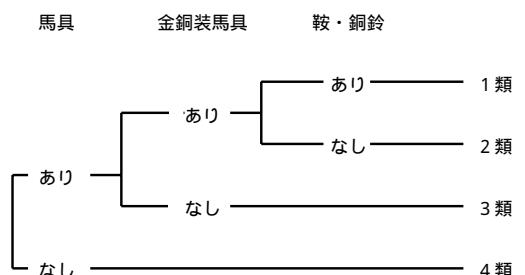
後期古墳の副葬品組成と墳丘・主体部規模との関連性について、信里・乗松2004での分析内容を再度確認する。時期はMT15～TK217型式期とし、香川県内の古墳群では比較的状況が判明している県西部の三豊平野に所在する母神山古墳群と、その周辺の縁塚古墳群、椀貸塚古墳、角塚古墳、平塚古墳を分析対象とする。また、MT15～TK10型式期について

は、三豊平野の状況が不鮮明であるため、丸亀平野西部の王墓山古墳と菊塚古墳を補足的に扱うこととする。

（1）副葬品組成の分類

群集墳内での階層性が馬具に表されているという視点（今井・近藤1970）に基づき、副葬品組成の類型を設定する。

副葬品組成 1類 金銅装馬具のほか、鞍や銅鈴をもつ。さらに、冠帽や胡簾を有し、有茎平根式鉄鏃に比べて長頸式鉄鏃が卓越す



- 1類：装飾付大刀・鋒・胡簾・飾り弓 長頸式鉄鏃 > 有茎平根式鉄鏃 冠帽
- 2類：鋒・飾り弓 農具 斧・刀子 石製紡錘車
- 3類：長頸式鉄鏃 < 有茎平根式鉄鏃 農具 斧・刀子 石製紡錘車
- 4類：長頸式鉄鏃 < 有茎平根式鉄鏃 農具 刀子

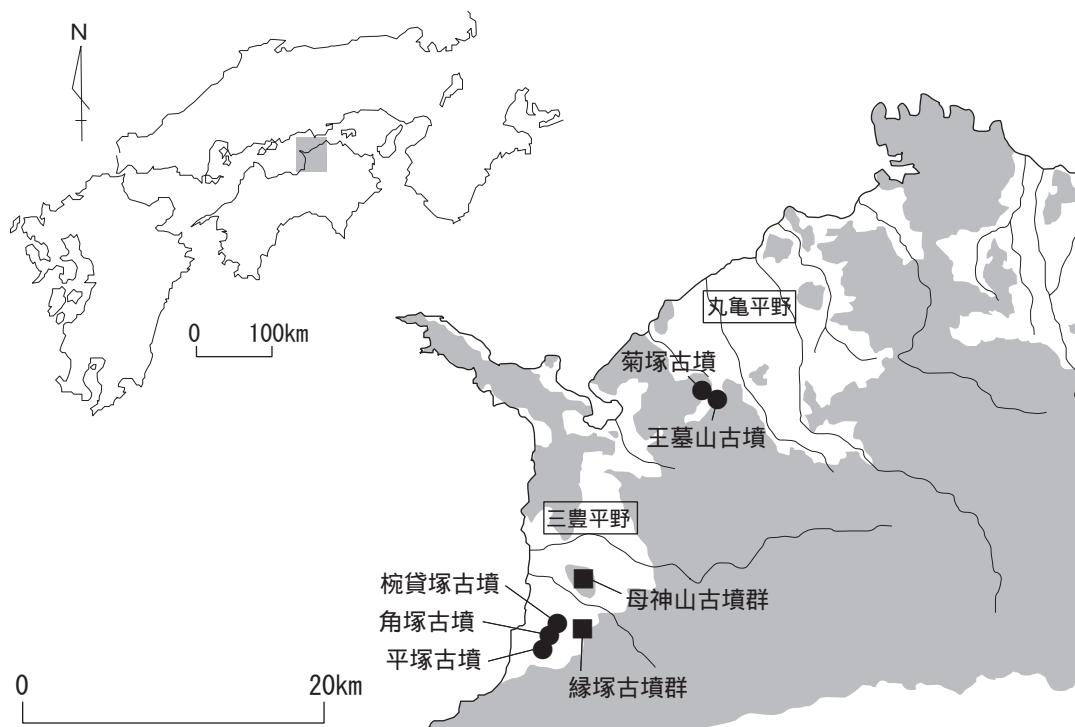
第1表 副葬品組成類分類表

るという特徴がある。また、U字形刃先や曲刃鎌といった農工具はごく少数しか存在しない。

副葬品組成2類 金銅装の馬具を有するが、鞍や銅鈴は認められない。さらに、1類にほとんど見られないU字形刃先や曲刃鎌、斧や刀子といった農工具や石製紡錘車といった手工業を連想させるような副葬品をもつ。

副葬品組成3類 馬具は有するが金銅装のものは存在しない。1類と異なり、長頸式鉄鎌に比べて有茎平根式鉄鎌の多寡が目立つ。また、2類同様U字形刃先や曲刃鎌、斧、刀子、石製紡錘車がみられる。

副葬品組成4類 馬具をもたないもの。その他の副葬品は3類と類似し、有茎平根式鉄鎌が多く、農具や刀子が認められる。



第3図 対象古墳位置図 ($S=1/10,000,000 \cdot S=1/500,000$)

(2) 副葬品組成と墳丘・主体部規模との関連性

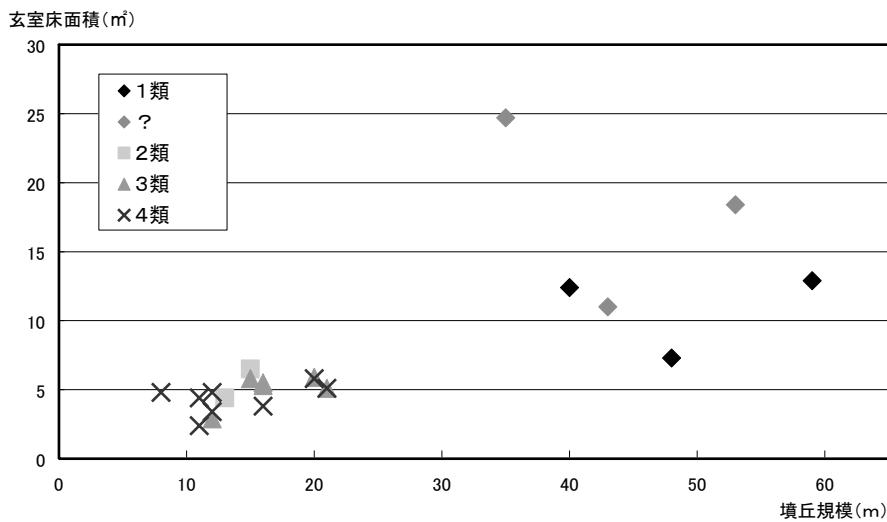
墳丘規模をX軸に、玄室床面積をY軸にとり、設定した副葬品組成の類型別にドットを落としたのが表3のグラフである。このグラフからは、前方後円墳や直径40mの円墳、玄室床面積7~12m²を有する王墓山古墳、菊塚古墳、母神山罐子塚古墳の副葬品組成がいずれも1類であることが分かる。一方、副葬品組成が2~4類の古墳はいずれも墳丘規模が21m以下、玄室床面積が6m²以下である。また、2~4類間では、副葬品組成類型と墳丘規模・玄室床面積に相関関係が認められず、階梯を見出すことができない。よって副葬品組成類型から見れば、1類と2~4類の間にのみ階層差が表現されているものと考えられ、本地域では、ごく少数の上位層墳と多数の下位層墳という階層構造が想定できる。このことから、例えば、群集墳における武器の階層性モデル（新納1983）をそのまま群集墳の階層性に置き換え、ピラミッド状の階層構造を想定するのは、本地域では困難である。

地 域 ・ グ ル ープ	古 墳 名	墳 形	墳 丘 規 模 (m)	玄 室 床 面 積 (m) ²	武器															
					馬具								鎌							
					有茎平根				長頭				武 具				農 具			
善通寺	1 王墓山	前方後円	48	7.3	TK10	3 (5)	1 ○ (4)	5	5	1	1 有	1 1 4	2	8	1 3 40	24	1 1 70	3 1	1 有	有
善通寺	1 菊塚	前方後円	59	12.9	TK10	①	1 ⑩ ①	有	1	3 1			10	1 11	4 1	1 1 12	19		有	
母神山A	? 飄草塚	前方後円	44	?	TK10?															
母神山B	1 龍子塚	円	40	12.4	TK43	6	1	1 ②	2	1	1 有	10	4 3 2	19	13 5 8	1 1 10	38	2	1 有	10 1
大野原	? 梅實塚	円	35	24.7	TK209															
大野原	? 平塚	方	53	18.4	TK209															
大野原	? 角塚	方	43	11.0	TK217															
母神山C	2 黒鳥林13	円?	?	4.9	TK209	③ (2)	1 1	2	1	1	1 有	4 1 12 1	1	18	1 3 2 13 3	18 2	有	有	1 1	2 1 1
母神山	2 長砂古4	円	13	4.4	TK10	①	1 2 1	有	2	1	2	1 3	1 3	1 3	1 3	1 3	1 3	1 3	1 3	1 6 1
縁塚	2 綠塚5	円	15	6.5	TK217		1 ○													1
母神山D	3 黒鳥林1	円	20?	5.9	TK43	1	1	4	1											6 1 1 2
母神山F	3 黒鳥林7	円	?	4.3	TK43															有 1
母神山F	3 黒鳥林6	円	16	5.3	TK43															3 2 4 6 5
母神山F	3 黒鳥林8	円	?	5.9	TK43															2 2
母神山G	3 上母神4	円	12	2.9	TK209															1 2 1 5
母神山J	3 久米塚	円	21	5.1	TK43															3
母神山K	3 千尋神社4	円	16	5.5	TK10	2				6										
縁塚	3 緑塚10	円	15	5.8	TK209					1	1 有									
母神山C	4 黒島林14	?	?	2.9	TK209															
母神山F	4 黒島林5	円	20	5.8	TK217															
母神山J	4 久米東塚	円	21	5.1	TK209					1										
母神山K	4 千尋神社6	円	12	3.4	TK10															
母神山K	4 千尋神社5	?	?	4.6	TK10					1	1	1	2	3	1	2	1	3	1 1 1 4	
母神山L	4 千尋神社1	円	8	4.8	TK209					1	1	1	2	1 3	10	1 2	1	1	5	
縁塚	4 緑塚12	円	11	2.4	TK43														2 1 1	
縁塚	4 緑塚1	円	16	3.8						1		1 2	1 4	1	1 2 1	1	5	2		
縁塚	4 緑塚11	円	11	4.4	TK10											2 2 1	1	3	1 1 2	
縁塚	4 緑塚2	円	12	4.8	TK43											1	1	1		
縁塚	4 緑塚14	?	?	5.8	TK43											1	1	1	2	
母神山C	? 上母神8主体	円	19	4.8	TK43															
母神山C	? 上母神8主体	円	19	2.8	TK43														有 有	

第2表 副葬品組成表

O は金銅接を示す

鎌の 有 は、有茎平根式と長頭式のうち、多い方を示す



第3表 副葬品組成類型別墳丘規模・玄室床面積相関グラフ

(3) 副葬品組成と立地の関連性

また母神山古墳群内の古墳を、主に立地から群設定（グルーピング）を行い（松本2001）、副葬品組成類型別に示したのが第4図である。ある程度古墳の状況が判明しているC群（上母神8号墳、黒島林13・14号墳）、F群（黒島林5～8号墳）を見てみると、群内での副葬品組成類型の階梯を見出すことは困難で、また、群内が同等の副葬品組成類型であるとも言えない。対して、やや恣意的である可能性もあるが、A群の瓢箪塚古墳、B群の母神山罐子塚古墳（1類）については単独に近い個々で位置している。副葬品組成類型と古墳群内の立地との関連性からみても、副葬品組成1類と2～4類は明瞭に区分され、さらに2～4類間に差異を認められない点が指摘できる。

2. 母神山古墳群における横穴式石室と階層性について

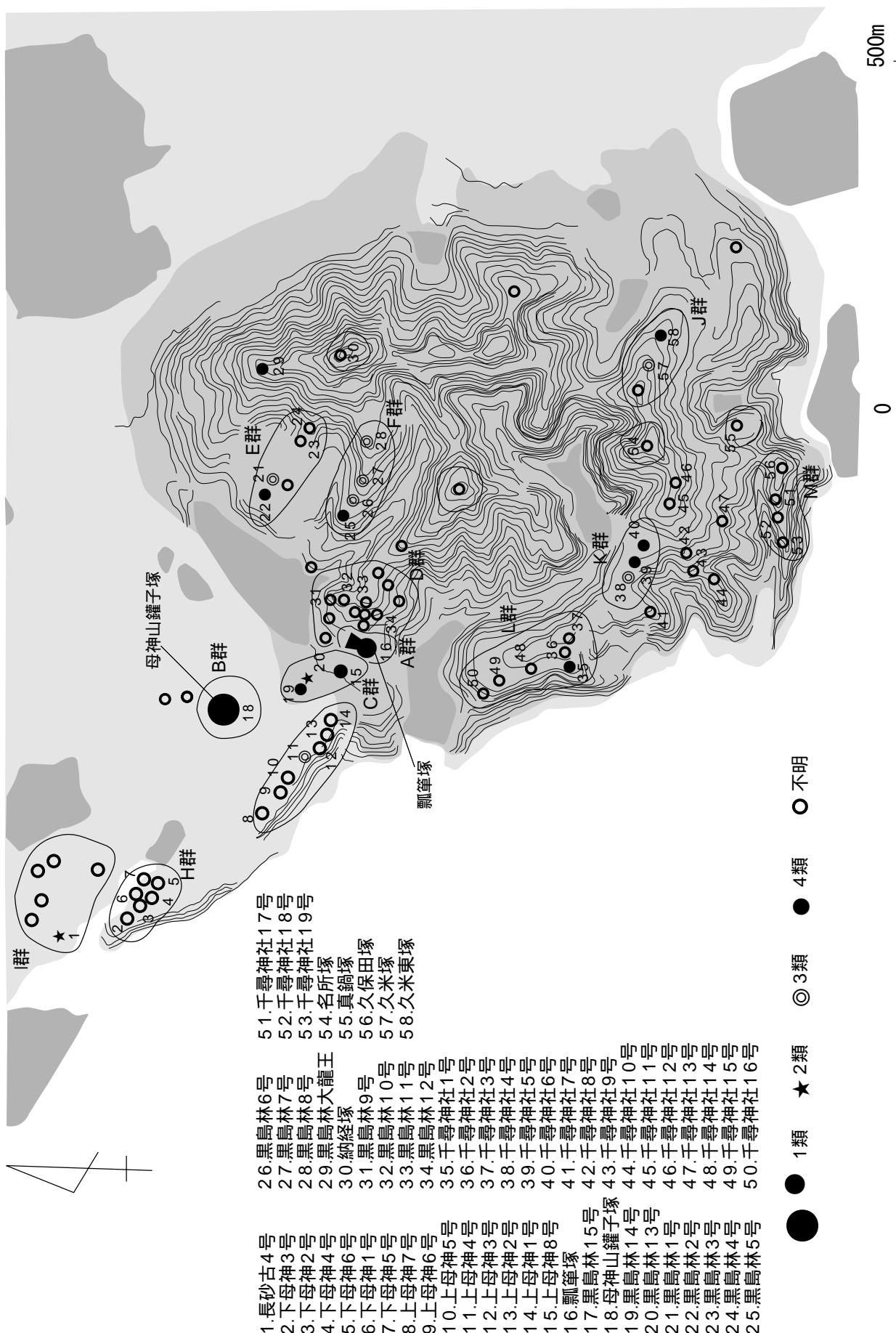
次に、横穴式石室の分析を行い、副葬品組成との関連性について検討する。分析対象は、母神山古墳群および椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳である。

(1) 分類

詳細な検討を可能とするために石室形態から分類を行う。まず玄室平面形がほぼ長方形のものを母神山A類、幅広の羽子板形のものを母神山B類、細長い羽子板形のものを母神山C類とする大別分類を行い、さらに玄室壁面の構築方法をもとに以下のように細分した。

母神山A 1類 玄室規模で他者を凌駕する一群。また、各壁面の2段目以上を大形～中形の石を用いて構築する点でも他者と異なる。

- ・玄室平面形：ほぼ長方形。
- ・袖部：羨道内側へ突出する。框石を有する場合もある。
- ・基底石：大形の石材を用いる。いわゆる腰石。
- ・基底石より上部の石：大形～中形の石材を用いる。
- ・奥壁基底石の数：1石、もしくは大形1石と小形1石で構成されるもの



第4図 母神山古墳群における副葬品組成類型別古墳分布図

母神山A 2類 石室の構築方法はA 1類にはほぼ同じであるが、各壁面の2段目以上を中形～小形の石を用いて構築する点で区別される。

- ・玄室平面形：ほぼ長方形
- ・袖部：羨道内側へ突出する。框石を有する場合もある。
- ・基底石：大形の石材を用いる。いわゆる腰石。
- ・基底石より上部の石：中形～小形の石材を用いる。
- ・奥壁基底石の数：1石もしくは2石

母神山B 1類 袖部が羨道内側へ突出し、かつ奥壁基底石が1～2石であるのが特徴。

- ・玄室平面形：幅の広い羽子板形
- ・袖部：羨道内側へ突出する。框石を有する場合もある。
- ・基底石：大形の石材を用いる。いわゆる腰石。
- ・基底石より上部の石：中形～小形の石材を用いる。
- ・奥壁基底石の数：1石もしくは2石

母神山B 2類 袖部が羨道内側へ突出しない点でB 1類と区別され、奥壁基底石数が1～2石である点でB 3類と区別される。

- ・玄室平面形：幅の広い羽子板形。なお、左肩袖形も構築法は同じなのでここに含める。
- ・袖部：羨道内側へは突出しない。框石は認められない。
- ・基底石：中形～小形の細長い石を使用。
- ・基底石より上部の石：中形～小形の石材を用いる。
- ・奥壁基底石の数：1石もしくは2石

母神山B 3類 奥壁基底石数が3石以上になる点でB 1・B 2類と区別される。

- ・玄室平面形：幅の広い羽子板形。なお、左肩袖形も構築法は同じなのでここに含める。
- ・袖部：羨道内側へは突出しない。框石は認められない。
- ・基底石：中形～小形の細長い石を使用。
- ・基底石より上部の石：中形～小形の石材を用いる。
- ・奥壁基底石の数：3石以上

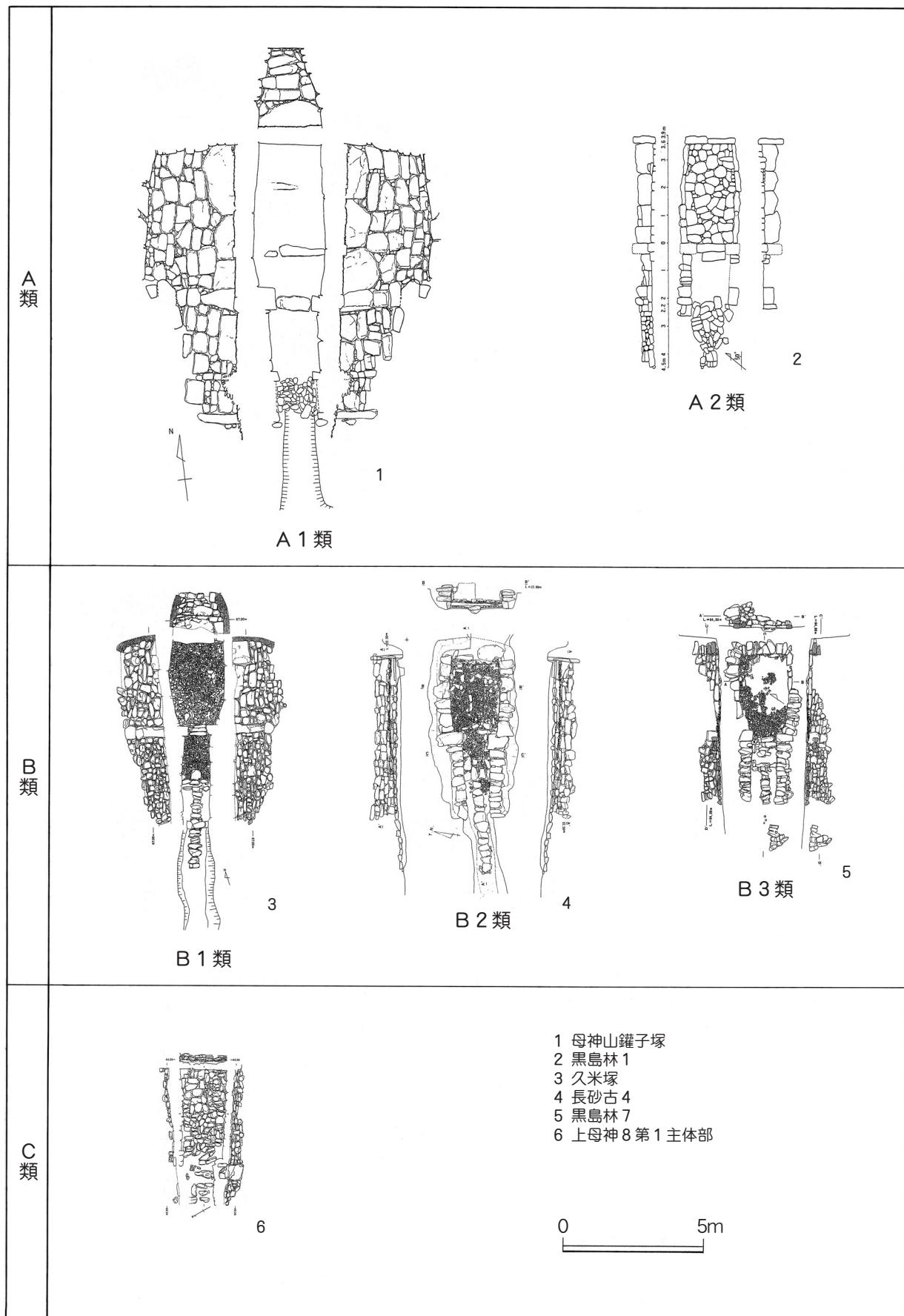
母神山C類 構造上の差違は認められないため細分しない。

- ・玄室平面形：細長い羽子板形を基調とする。右肩袖のものも認められる。
- ・袖部：羨道内側へは突出しない。框石は認められない。
- ・基底石：中形～小形の細長い石を使用。
- ・基底石より上部の石：中形～小形の石材を用いる。
- ・基底石数：3石以上

(2) 変遷

対象資料から出土した須恵器をもとに変遷を追い、各時期における石室の特徴を抽出した。

T K 10型式期 母神山古墳群における横穴式石室の出現期である。M T 85型式期以降の石室との比較から、以下のことがこの時期の特徴として挙げられる。



第5図 横穴式石室分類図 ($S=1/200$)

- ① 玄門立柱石の不在：袖部において、各壁面で使用される石材との区別はなされていない。
- ② 大形基底石（腰石）の不在：2段目以上の石が小口積みされるのに対して、基底石は横積みされる点で区別されているが、大きさにおける区別は不明瞭である。

これらの特徴は、地域は異なるものの、同時期に築造された王墓山古墳（T K 10型式期）においても同様である。当該期の資料としては、黒島林8号墳（B 2類）、千尋神社4～6号墳（C類）があり、いずれも上記の特徴を有する。

M T 85型式期 基本的にはT K 10型式期と同様であるが、若干の時期的変化として、以下のことが挙げられる。

- ① 大形基底石（腰石）使用の萌芽：部分的にではあるが、基底石における大形化が認められる。

当該期の資料としては長佐古4号墳（B 2類）がある。

T K 43型式期 石室の構造変化が最も大きいのがこの時期である。新出要素としては、以下のことが挙げられる。

- ① 玄門立柱石の出現 基底石を立てることで各部との区別が明瞭になる。あるいは、厳密には立柱石とはいえなくとも、他の部材に比べて大形の石材が使用されるようになる。また立柱石と天井石との間には、1～2石以上の中形～中形の石材が存在する。
- ② 大形基底石（腰石）の出現
- ③ 榼石の出現 玄門部天井石の直下に横石（楕石）を渡すことで、玄門部天井を一段低くする。
- ④ 複室構造の出現
- ⑤ 袖部の羨道内側への突出・樁石の出現

これらのうち、④は既に菊塚古墳（M T 85型式期）においても認められるため、母神山古墳群においても今後の調査で前段階の資料から確認される可能性はありうる。また、①はこの時期の資料全てに認められ、母神山古墳群において、前段階の資料と区別する明瞭な指標となっている。

当該期の資料としては、母神山罐子塚古墳（A 1類）、黒島林6号墳（B 1類）、黒島林7号墳（B 3類）、上母神8号墳第1主体部・第2主体部（C類）がある。

T K 209型式期 前段階ほど目立った変化はないが、新出要素としては以下のことが挙げられる。

- ① 玄門立柱石と楕石の接地 玄門立柱石と楕石が直に接することが前段階との相違点であるが、それは楕石の下方突出がより顕著になることでなされている。また、この部材は、玄門部の天井石とは別の石材を用いられている点も、この時期の特徴といえる。

当該期の資料としては、椀貸塚古墳（A 1類）、黒島林1号墳（A 2類）、久米塚古墳（B 1類）上母神4号墳（B 3類）が挙げられる。

T K 209～T K 217型式期古段階 前段階と同様、玄門部天井に変化が認められる。

- ① 鴨居石の出現 前段階では、楕石を用いて天井部を低くしていたのが、この時期には、玄門部の天井石を下方突出させることで形成されている（鴨居石）。
- ② 複室構造の消滅・簡略化

当該期の資料としては、平塚古墳（A 1類）、黒島林5号墳（A 2類）、久米東塚古墳（A 2類）が挙げられる。

T K 217型式期 この時期の資料として挙げられるのは角塚古墳（A 1類）のみである。しかも、角塚古墳

は未調査のため厳密な時期比定はできない。ただし、前段階との比較から以下のような特徴がこの時期に出現在ものと想定できる。

- ① 鴨居石の消滅
- ② 天井部のレベルの均一化：前段階までは玄室天井部よりも羨道天井部を低くしていたのが、この段階でほぼ同じ高さになる（平天井）。なお、この特徴は①と連動しているものと思われる
- ③ 玄室壁面の一段一石積み：奥壁および側壁を大形の石材1石で構築しようと意図しており、大形の石材では埋まりきらない隙間を、他の石材で充填している。

以上のように、各時期における新出要素を抽出してみると、石室の構築法において最も変化に富むのが玄門部であることは明らかである。このような時期的变化が、三豊平野においてどの程度通有のものであるかは今後検討していく必要があろう。

＜母神山古墳で抽出される玄門部の時期的変化＞

玄門立柱石の不在（TK10～MT85型式期）

↓

玄門立柱石・楣石の出現・袖部の突出（TK43型式期）

↓

玄門立柱石と楣石の接地（TK209型式期）

↓

鴨居石の出現（TK209～TK217型式期古段階）

↓

鴨居石の消滅（TK217型式期）

ところで、これまでに抽出した各時期における諸特徴を、それぞれのタイプがどの程度反映しているかをみると、2つの系統に分けられる（第4表）。

時期	各時期の諸特徴	A1類	A2類	B1類	B2類	B3類	C類
TK10型式期	玄門立柱石の不在	-	-	-	○	-	○
	大形基底石（腰石）の不在	-	-	-	○	-	○
(MT85型式期)	大形基底石（腰石）の萌芽	-	-	-	○	-	-
TK43型式期	玄門立柱石の出現	○	-	○	-	○	○
	大形基底石（腰石）の顕在化	○	-	○	-	×	×
	複室構造の出現	○	-	○	-	×	×
	袖部突出・框石出現	○	-	○	-	×	×
TK209型式期	玄門立柱石と楣石の接地	○	?	○	-	×	-
TK209～TK217型式期古段階	鴨居石の出現	○	?	-	-	-	-
	複室構造の消滅・簡略化	○	○	-	-	-	-
TK217型式期	鴨居石の消滅	○	-	-	-	-	-
	天井部レベルの均一化	○	-	-	-	-	-
	玄室壁面の一段一石積み	○	-	-	-	-	-

第4表 石室類型別新出要素一覧表

石室構造Ⅰ群：各時期の新出要素をほとんど採用する一群…A 1類、A 2類、B 1類、B 2類

石室構造Ⅱ群：各時期の新出要素をほとんど採用しない一群…B 3類、C類

ここで奥壁基底石数に着目してみると、Ⅰ群は1～2石であるのに対して、Ⅱ群は3石以上であるから、Ⅰ群とⅡ群の区別は奥壁基底石数とも対応している。このうち、奥壁基底石数が1～2石のもの多くは、奥壁側から数えて1石目の側壁基底石が大形であり、奥壁の基底石と合わせてコの字形の平面形を呈する。これは國木氏が既に指摘しているように、石屋形を意識したものであり、九州系の要素といえる（國木1988）。また、横穴式石室出現期のみに存在するB 2類を除いて、Ⅰ群はいずれも袖部が羨道内側へ突出することや、樋石や腰石を用いていることで共通しており、総じてⅠ群は九州系と言い換えることができる。一方、Ⅱ群のうち、C類は豎穴式石室の構築法を用いた在地系と既に位置付けられており（國木1988）、同じくⅡ群のB 3類の構築法も同様である。また、Ⅱ群の時期的变化は、実のところ玄門立柱石の出現のみであり、それ以外は出現期（TK 10型式期）の特徴を保持したままTK 209型式期にまで至っている。

石室構造Ⅰ群 — 九州系 — 奥壁基底石1・2石 — 時期的变化に富む

石室構造Ⅱ群 — 在地系 — 奥壁基底石3石以上 — 時期的变化に乏しい

(3) A類における平面形の詳細

I群に属するA 1・A 2・B 1・B 2類は、玄室平面形が長方形を呈するA 1・A 2類と、幅の広い羽子板形を呈するB 1・B 2類に大別できる。このうち、B 1類とB 2類を比較してみると、B 1類が九州系の石室構築法の各要素のほとんどを採用しているのに対して、B 2類で明確に認められる九州系要素は、石屋形を意識した奥壁近辺の基底石のみである。よって、B 1類とB 2類の違いは明瞭である。

これに対してA 1類・A 2類は、玄室平面形・石室構築法ともに基本を同じくしており、規模を除けば大きな差異は実際のところない。しかし、玄室平面形の時期的变化に注目すると両者の違いがみえてくる。

第6図はTK 43型式期以降の各類における玄室平面形の変遷を示したものである。胴張り化がよく認められるのはⅠ群であり、時期が下るにつれて胴張り化が顕著になることが読み取れる。しかし、その変化の度合いは一様ではなく、A 1・A 2・B 1類でそれぞれ差異が生じている。

A 1類 脇張り化の程度は弱い。むしろ、時期が下るにつれてより直線的になる。

A 2類 出現期の脇張り化の程度は弱いが、時期が下ると顕著になる。

B 1類 出現期から脇張り化が明瞭。

よって、玄室平面形の時期的变化でみれば、脇張り化の強弱に基づいて、A 1類とA 2・B 1類に大別でき、A 1類とA 2類の区別が明瞭になる。

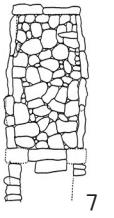
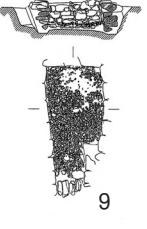
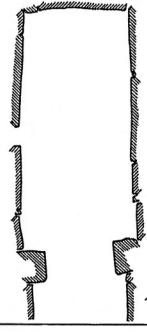
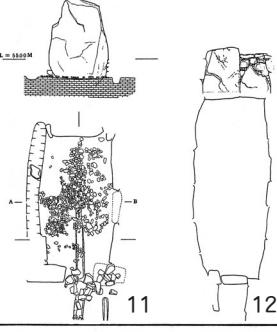
さらに、複室玄門部に着目すれば、その差異はより明瞭となる（第10・11図参照）。

A 1類 複室玄門袖部が羨道内側へ突出する。また、TK 209型式期以降、天井部も下方へ突出させる。これらの特徴は、玄室玄門部と同様のものである。

A 2・B 1類 複室玄門袖部が内側へ突出しない。天井部の下方突出も認められない。

ここでもやはり、A 1類とA 2・B 1類に大別できる。

このような差異が生じる原因を追求するためには、B 1類とB 3類の違いから見ていくとわかりやすい。B 1・B 3類は玄室平面形が幅の広い羽子板形である点で共通するにも関わらず、B 1類は脇張り化し、B 3類は脇張り化が不明瞭である。これは奥壁基底石数が大きな影響を及ぼしている。B 1類が従来の幅の広

	奥壁基底石数 1~2 石以上 (I 群)			奥壁基底石数 3 石以上 (II 群)	
	A 1 類	A 2 類	B 1 類	B 3 類	C 類
TK 43	 1		 2	 3	 4
TK 209	 6	 7	 8	 9	
TK 209 TK 217 古	 10	 11	 12	<p>1 母神山罐子塚 2 黒島林 6 3 黒島林 7 4 上母神 8 第 1 主体部 5 上母神 8 第 2 主体部 6 梶貸塚</p> <p>7 黒島林 1 8 久米塚 9 上母神 4 10 平塚 11 黒島林 5 12 久米東塚</p>	

第 6 図 玄室平面形の変遷図 (S=1/200)

い羽子板形を維持するためには、奥壁基底石をもう 1~2 石増やし奥壁付近の玄室幅を増やすなければ達成しない。しかし、それを成さずに奥壁基底石数にこだわっていることから、B 1 類が玄室平面形よりも奥壁基底石数を重視していることが読みとれる。また、このような奥壁基底石数と胴張り化との関係は各類全般にいえることであり、I 群と II 群との区別の指標として、胴張り化の有無も指摘できる。

I 群 胴張り化が認められる（奥壁基底石数を重視）。

II 群 胴張り化が認められない。

このような状況下で、A 1 類は胴張り化が弱いどころか、時期が下るにしたがって直線的になっていくという事実に対しては、さらなる評価が必要となる。すなわち、A 1 類は奥壁基底石数を重視すると同時に、平面形の規格をも意識しているのである。ここから読み取れるのは、石室設計および築造時における規格の厳

格性であり、これこそが、A 2・B 1類と袂を分かつ大きな要因であろう。複室玄門袖部および天井部の下方突出についても、直接的には施設充実の有無、もしくは羨道部との区別の明瞭・不明瞭という評価が下せようが、その背景には規格の厳格性が起因しているものと思われる。

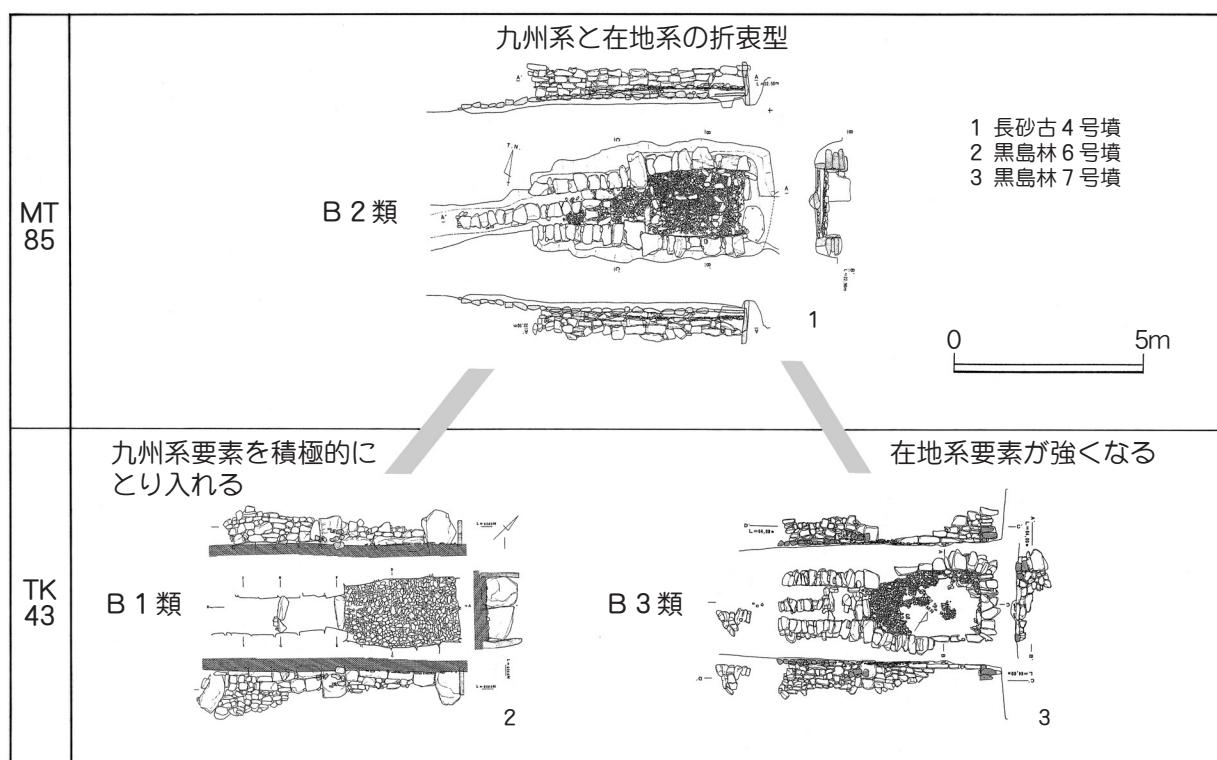
(4) B類の系譜

B類の出現経緯、およびその系譜関係について考えてみる。

B類で最も古く出現するB 2類は、石屋形を意識した奥壁付近の基底石の配置という点で九州系要素が認められるが、それ以外の石室構築法はⅡ群（在地系）と同様である。従って、九州系と在地系との折衷型と評価できる。

三豊平野の在地型横穴式石室について國木氏は、「6世紀前半～中葉にかけて三豊在地型の横穴式石室が成立」とし、これに相当するものとして千尋神社4～6号墳（本稿ではC類に相当）を挙げている（國木1988）。石室構築方法、玄室平面形において、前代の墓制である豎穴式石室の要素が多く認められるものを在地型と評価することが許されるならば、氏の見解は的を射ており、支持できるものである。

そこで、あらためて三豊在地型のC類と折衷型のB 2類を比較すると、両者は石室構築法のみではなく、玄室平面形での違いが指摘できる。すなわち、C類が細長い羽子板形を基調とするのに対してB 2類は幅の広い羽子板形である。これは、石屋形の模倣という九州系要素が在地型の石室に加わる際、石室主軸直交型納棺をも意識したことによる。したがってB 2類は、玄室平面形においても、「羽子板形」という点で在地型であり、「幅が広い」という点では九州系要素を含む折衷型という評価が下せる。



第7図 母神山B類における系譜 (S=1/200)

C類

在地型 穫穴式石室の構築法 → 折衷型 石屋形を意識した奥壁付近の基底石
細長い羽子板形

B2類

幅の広い羽子板形

以上は、TK10～MT85型式期についての経緯である。次の段階（TK43型式期）になると、B2類は消滅し、相前後して、B1類・B3類が出現する。いずれもTK209型式期まで確認でき、消長を同じくする。このうち、B3類については、石室構築法の特徴からⅡ群（在地系）としていたが、「幅の広い」羽子板形であることから、玄室平面形においては九州系の影響を受けていることが上記の検討から指摘できる。すなわち、奥壁付近の基底石からは、石屋形に対する意識は認められないものの、平面形は石室主軸直交型納棺を意識している。よって、B2類を折衷型の祖形とするならば、B3類は九州系要素が一部省略化されたものであり、在地系要素が強くなったと評価できる。一方、B1類はB2類に比べて九州系要素が多く、より九州系の影響を受けるようになったものと評価できる。つまり、折衷型であるB類の変遷においては、九州化の流れと在地化の流れのいずれか一方向が存在するのではなく、B2類を祖形として両者の方向性が同時期に認められるのである（第7図）。

（5）母神山古墳群における各類型の階層性

ここで、これまでの検討から各類を組列化すると、以下のようになる。

九州系← →在地系
A1・A2—B1—B2—B3—C

すなわち、在地系要素をほとんど抽出できないという点でA1・A2類が九州系の最たるものであり、逆に九州系要素を全く抽出できないという点でC類が在地系の最たるものに位置付けられる。折衷型であるB類は、両者の中間に位置付けられるが、九州系要素を多く抽出できる順に並べると、B1→B2→B3となる。

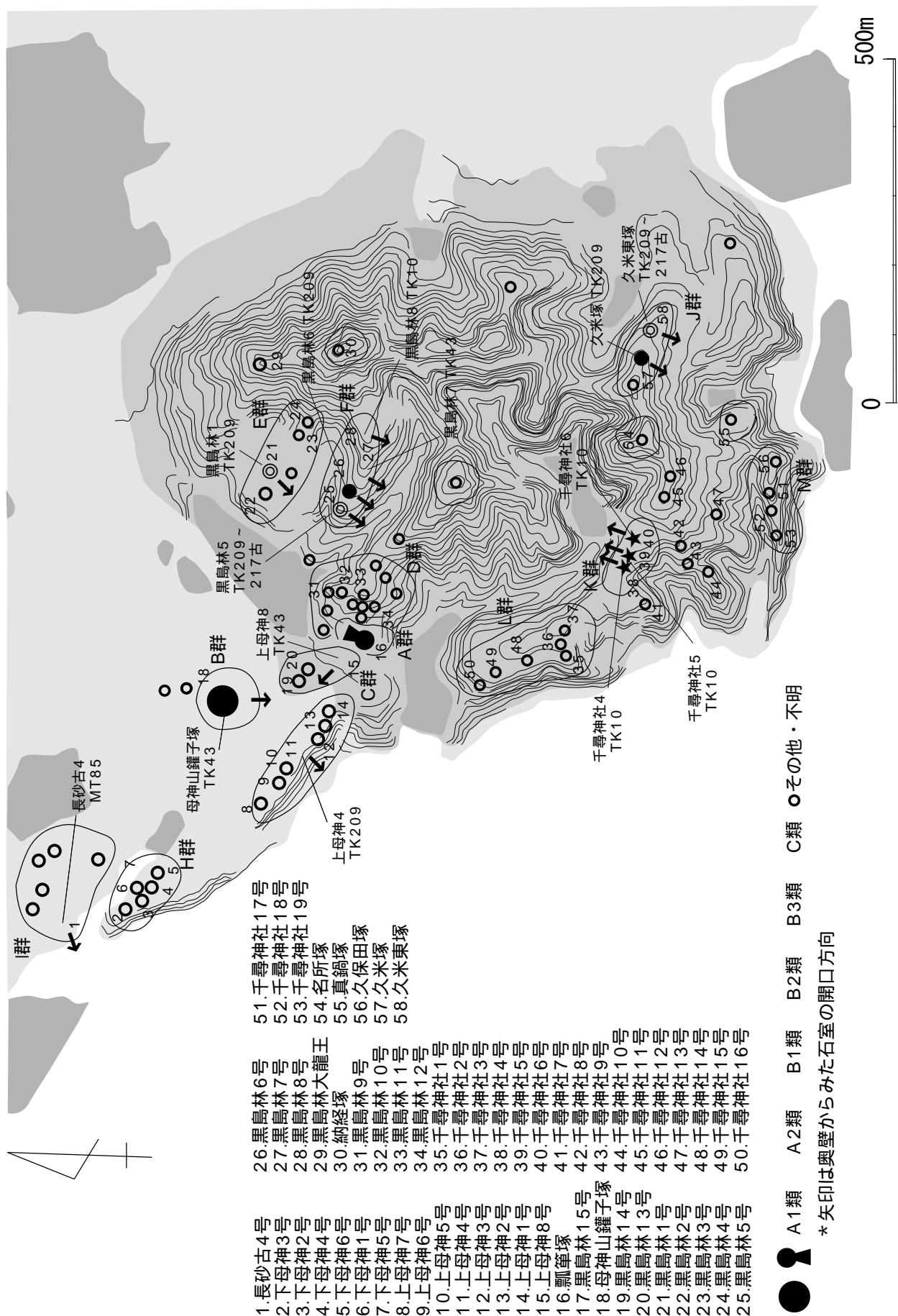
これらのうち、玄室規模（床面積）および規格の厳格性という点においてA1類が他者を凌駕しており、階層差においてA1類が最も優位にあるといえる。

A1>A2・B1・B2・B3・C

では、A2・B1・B2・B3・C類においては、A1類に最も近いA2類が、A1類に次いで階層において優位なものといえるだろうか。ひいては、九州系要素が多いものほど階層的に上位にあるといえるだろうか。

第8図は母神山古墳群における各石室タイプの分布とその築造時期を示したものである。各群のうち、変遷を明確に追えるのはF群で、B2類（TK10）→B3類（TK43）→B1類（TK209）→A2類（TK209～TK217古段階）の順に継続的に築造されている。また、ひとつの尾根筋に、頂上部から端部に向けて順次営まれている。これは、母神山古墳群におけるひとつの集団の造墓活動を如実に示していると考えられる。したがって、同一集団の造墓活動において採用されているA2類とB1～B3類は、基本的には階層的な区別で築造されていないと評価できる。J群においても、B1類（TK209）→A2類（TK209～TK217古段階）の順に、尾根頂上部から端部に向けて築造されており、A2類とB1類の違いが階層差ではなく時期差であることを示唆している。

またF群において、B類は、B2→B3→B1の順に築造されており、前項で指摘したように、折衷型の



石室においてはB2類が祖形にあたるという見解がここでも支持できる。ただし、B類の型式変遷をB2→B3→B1としてしまうと、折衷型→在地系要素が多くなる→九州系要素が多くなる、という流れになり、型式組列としては不自然である。いずれにせよ、B1・B2・B3類も階層差を示していない可能性が高い。

次にK群に注目してみると、K群はすべてC類で構成されており、ここに至ってC類がA2・B1・B2・B3類とは立地において区別されることが読み取れる。また、K群はいずれもTK10型式期に築造されており、かなりの短期間に継続的に営まれたことがうかがえる点でも特異である。憶測の域を出ないが、C類は追葬回数が少なく（0～1回か？）、そのため、隨時築造していく必要があったのではないかと思われる。つまり、墓制においても前段階の竪穴式石室の要素を色濃く残している可能性があげられる。

さらに、開口方位に着目すると興味深い事象が抽出できる。母神山古墳群の各石室の開口方位については、概ね以下の規則性がうかがえる。

- ① 尾根筋に対して直交方向に開口される。
- ② 南側に開口される。

②については、南西～南の範囲内ではらつきがあるが、これは①を優先させた結果と考えられる。ところが、C類だけは、①は遵守するものの開口方位は概ね北側からである。これはK群以外で確認できるC類においても同様であるから、K群だけが特殊なのではなく、C類全般にいえるものと推察できる。

以上のことから読み取れるのは、母神山古墳群を築造した集団内における、C類築造集団の特異性である。ここに、階層差を見出す余地は残るが、その是非を見極めるまでには至らなかった。

（6）横穴式石室からみた階層性

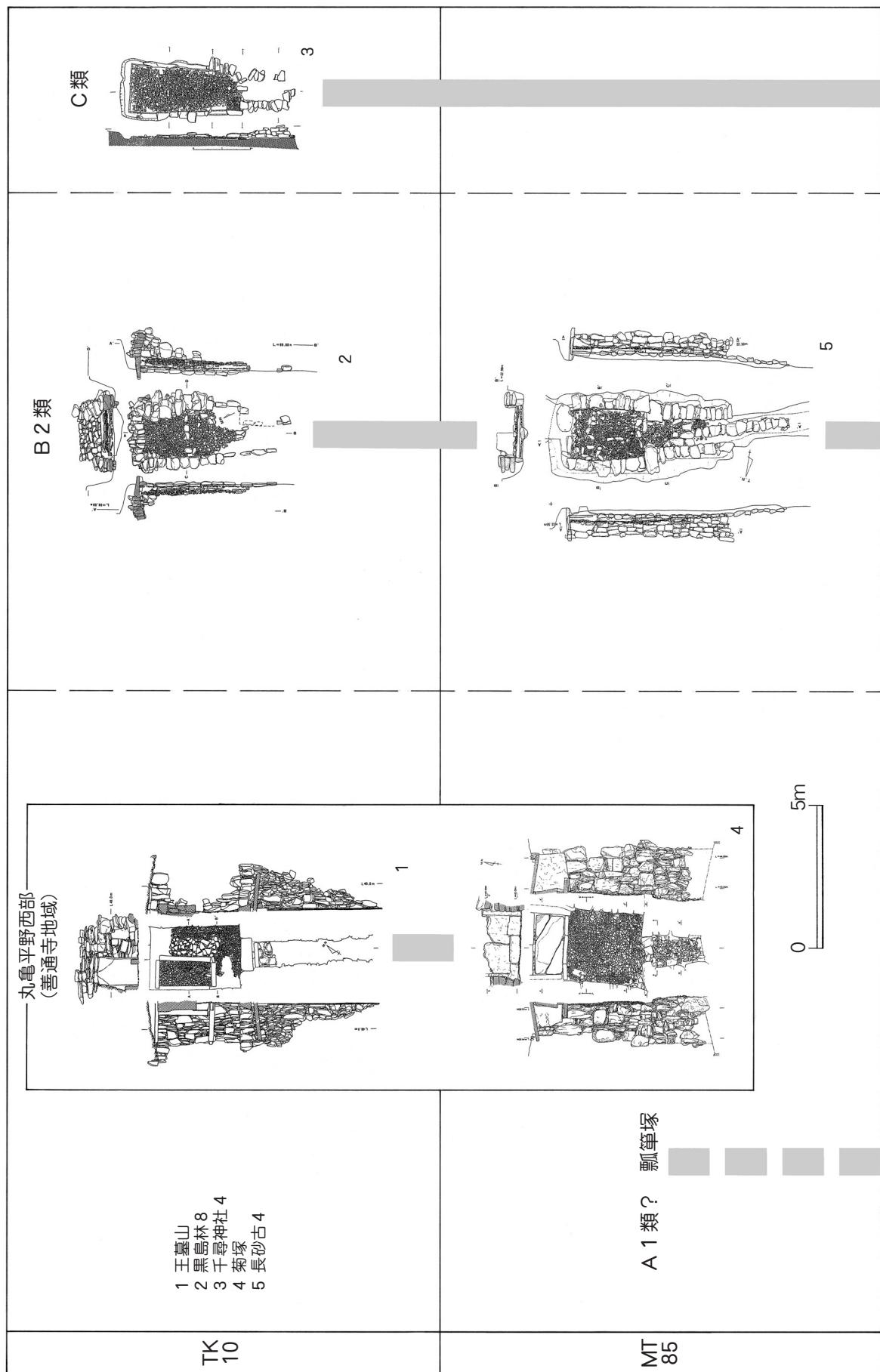
母神山古墳群をいくつかの視点から検討してきたが、結局のところ、階層差として見出せたのはA1類の優位性のみであり、A2およびB1・B2・B3類においては階層差は認められない。唯一、C類が他者より下位に位置付けられる可能性はあるが、今回明らかにしたのはあくまでC類の特異性であり、階層差を示すものではなかった。

$$A1 > A2 \cdot B1 \cdot B2 \cdot B3 \ (\geq) C$$

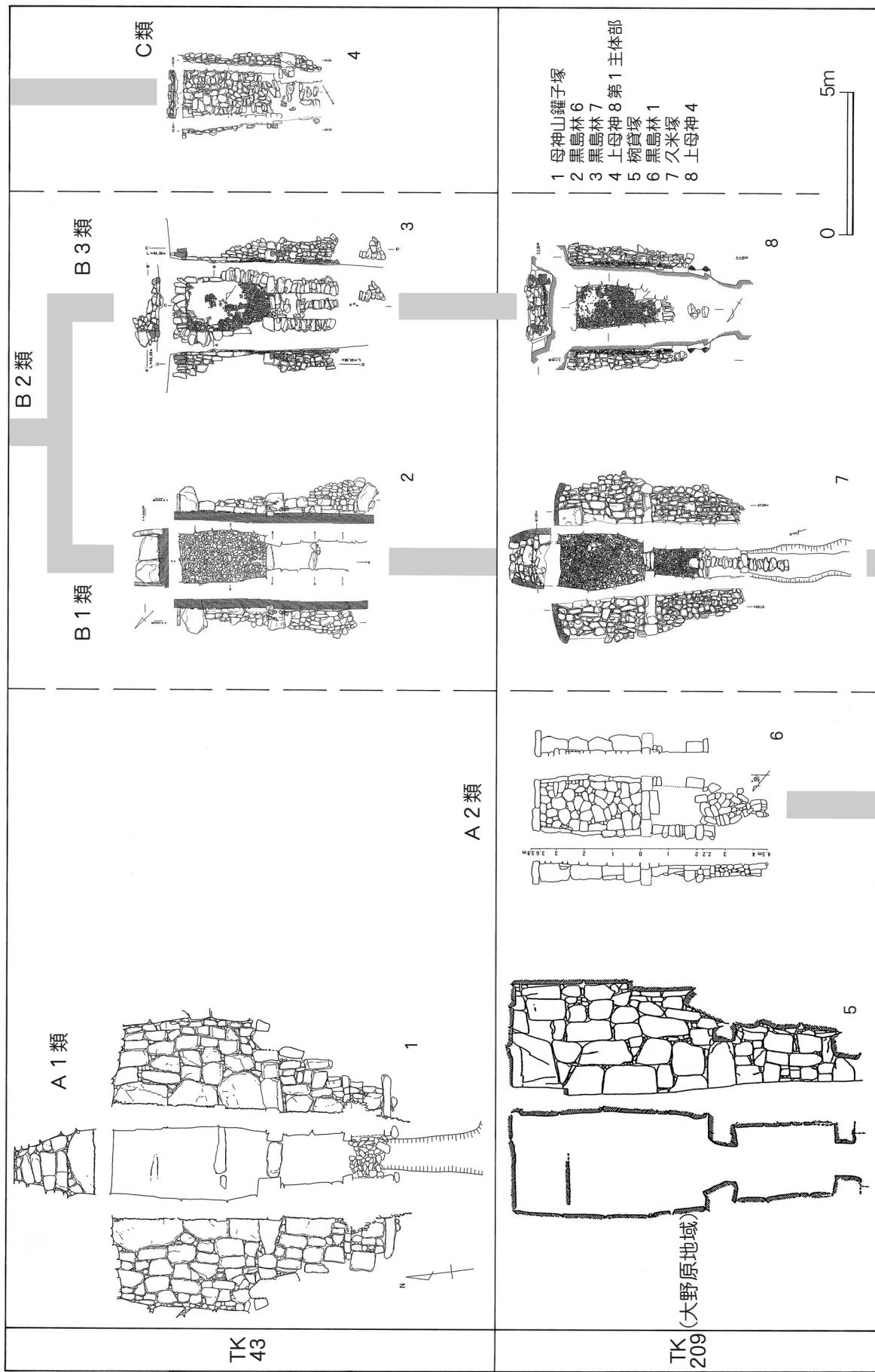
また、各類型と副葬品組成の対応関係を見ると、以下のようになる。

- A1類：副葬品組成1類（3例）
- A2類：副葬品組成3類（1例）・4類（2例）
- B1類：副葬品組成3類（2例）
- B2類：副葬品組成2類（1例）・3類（1例）
- B3類：副葬品組成3類（2例）
- C類：副葬品組成3類（1例）・4類（2例）

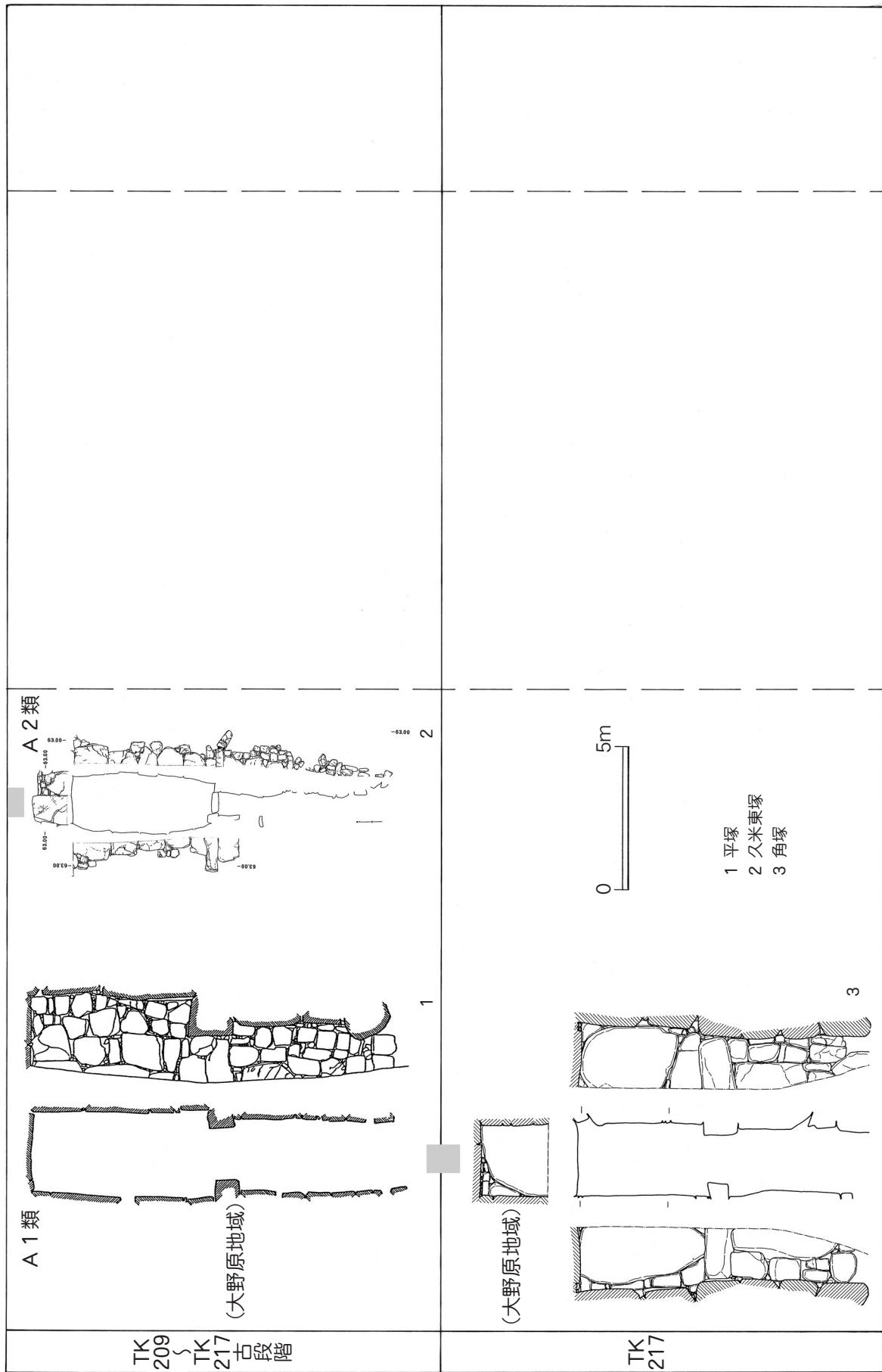
相関関係が高いのは石室A1類と副葬品組成1類のみであり、それ以外の類型から階層的な差異を見出すのは困難である。したがって、少数の上位層墳と多数の下位層墳（信里・乗松2004）という結論を追認するに至る。



第9図 母神山古墳群ほか 横穴式石室変遷図1 ($S = 1/200$)



第10図 母神山古墳群(ほか) 横穴式石室変遷図2 ($S = 1/200$)



第11図 母神山古墳群(ほか) 横穴式石室変遷図3 (S = 1 / 200)

III. 後期古墳の階層性と鉄鎌

1. 上位層墳に副葬される鉄鎌の特質

以上、後期古墳における階層構造について、ごく少数の上位層墳と多数の下位層墳という構図（信里・乗松2004）を確認した。ここでは、特に上位層墳に副葬される鉄鎌について、その特質を明らかにしたい。

長頸式鉄鎌を主体とする組成 II. で述べたとおり、上位層墳と見られる古墳の副葬品組成1類の鉄鎌組成では、有茎平根式鉄鎌に比べて長頸式鉄鎌が卓越する。これは、上位層墳に胡籠などの盛矢具が納められていたことを示唆しているのではないだろうか。

独立片逆刺をもつ有茎平根式鉄鎌 T K 10型式期の王墓山古墳では、独立片逆刺をもつ有茎平根式鉄鎌が1点出土している（第12図）。本地域では前後の系譜関係を押さえることができない型式であることから、特殊性を指摘でき、その特殊性は上位層墳である王墓山古墳を特徴づけるものと捉えられる。なお、独立片逆刺をもつ有茎平根式鉄鎌については、中期後半を中心として全国各地に展開することが指摘されている（鈴木2003 b）が、本地域での出現はT K 10型式期であるため、中期後半での状況とはやや異なる可能性もある。

段違い逆刺をもつ長頸式鉄鎌 T K 10型式期の上位層墳である王墓山古墳では段違い逆刺を有する長頸式鉄鎌が出土している。段違い逆刺をもつ長頸式鉄鎌は、後期初頭以後、中期の独立片逆刺を有するものに取って代わり、各地の有力首長墳に副葬される（鈴木2003 a）。王墓山古墳からの出土も同様の状況を示しているといえよう。

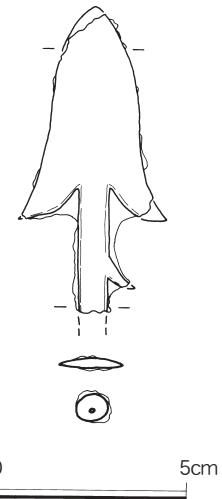
新出型式の長頸式鉄鎌 王墓山古墳に後続すると見られる菊塚古墳では、柳葉式や三角形式の鎌身部断面形が片丸造りのもの（第2図28・29）が認められる。さらに、T K 43型式期の母神山罐子塚古墳では、鎌身部の厚さが増し、断面形が二等辺三角形に近い柳葉式（第2図33）や、扁平で逆刺の外反が強い腸抉柳葉式（第2図30・31）が出土している。これら新出型式の長頸式鉄鎌の副葬も上位層墳の特徴である。

2. 後期古墳の階層性と鉄鎌

1. の状況をまとめると、上位層墳には一部特殊な有茎平根式鉄鎌が見られるものの、長頸式鉄鎌の多寡や段違い逆刺をもつ長頸式鉄鎌の存在、新出型式長頸式鉄鎌の積極的導入というように、長頸式鉄鎌に対するこだわりが看取される。対して、下位層墳出土の有茎平根式には複数形式のものが認められ、上位層墳と下位層墳では、副葬される鉄鎌の取扱いが異なっている点を指摘できる。I. で明らかにした編年上の第2の画期（有茎平根式鉄鎌のバリエーションが増加するT K 10型式期）の背景には、そういった階層間における鉄鎌副葬についての「決まりごと」の成立が想定されるのではないだろうか。また、その「決まりごと」は、古墳築造数の増加による副葬鉄鎌需要の高まりに伴って成立した可能性がある。

おわりに

本稿では、香川県西部地域を対象とした後期古墳のうち、特に階層上位と目される古墳に副葬される鉄鎌の特質について明らかにした。三豊平野の西に隣接する宇摩平野（愛媛県東端地域）でも6世紀後半～7世



第12図 独立片逆刺をもつ有茎平根式鉄鎌 (S=1/2)

紀前半の古墳が展開し、住吉古墳（玄室床面積13.8m²）→宝洞山1号墳（同8.6m²）→向山1号墳（同10.0m²）の上位層墳と見られる系譜が存在し、お姫山1号墳（同6.0m²）、お姫山2号墳（同6.0m²）といった下位層墳も認められる。ただし、下位層墳は少数で群をなさず、少数の上位層墳と多数の下位層墳といった階層構造は考えにくい（註3）。隣接する平野間でも階層構造に差異が認められれば、階層性のなかでの鉄鏃のあり方も異なる可能性がある。今後、他地域との比較検討を行うことにより、本稿で指摘した点が空間的にどこまで有効性をもつのか、より具体的なものとなるだろう。

本稿を作成するにあたり、大久保徹也・尾上元規・海邊博史・久保田昇三・笹川龍一・鈴木一有・中勇樹・信里芳紀・古野徳久・松本和彦・渡部明夫・渡邊淳子の各氏には多大な協力を得、善通寺市教育委員会には王墓山古墳出土未報告資料の掲載許可を頂きました。深く感謝いたします。また本稿は、前述のように信里芳紀氏と乗松の共同作業（信里・乗松2004）がベースとなっており、氏の力無くては本稿を成すことができませんでした。

註

- 1 古墳時代研究プロジェクトチーム1994、財団法人静岡県埋蔵文化財研究所編2003等。
- 2 王墓山古墳出土三角形式長頸式鉄鏃70点中には段違い逆刺をもつものもある程度含む可能性がある。
- 3 宇摩平野の古墳の状況については松岡1960を参考にした。

引用・参考文献

- 今井亮・近藤義郎 1970「群集墳の盛行」『古代の日本』第4巻 中国・四国 角川書店
太田宏明 1999「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号 考古学研究会
尾上元規 1993「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
國木健司 1988「三豊平野における後期古墳の展開」『大原塚古墳発掘調査報告書』三野町教育委員会
國木健司 1995「香川の横穴式石室」『古代学協会四国支部第9回徳島大会資料 四国における横穴式石室の成立と展開』
古代学協会四国支部
古墳時代研究プロジェクトチーム 1994「神奈川県における墳墓出土の鉄鏃について」『神奈川の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター
財団法人静岡県埋蔵文化財研究所編 2003『静岡県埋蔵文化財研究所 研究紀要第10号』財団法人静岡県埋蔵文化財研究所
鈴木一有 2003 a「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『静岡県埋蔵文化財研究所 研究紀要第10号』財団法人静岡県埋蔵文化財研究所
鈴木一有 2003 b「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第11集』帝京大学山梨文化財研究所
新納泉 1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会
信里芳紀・乗松真也 2004「讃岐地域における後期古墳の階層構造～墳丘規模・内部主体・副葬品の検討を中心に～」『第9回中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集 中・後期古墳の階層構造』（発表要旨）、『中四研だより』第20号（報告要旨）中国四国前方後円墳研究会
松岡文一 1960『川之江市史 第1輯 古墳時代篇』川之江市教育委員会
松本和彦 2001「香川県における前方後円墳後期首長墳の動向～集成9期の動向を中心に～」『中国・四国前方後円墳研究会第7回研究会 資料集』中国四国前方後円墳研究会

图表出典

第1・2図：王墓山古墳出土鉄鎌は中里原図、その他の鉄鎌の実測図は各古墳の報告書および信里・乗松2004からの引用／第3図：今回作図／第1表：信里・乗松2004からの引用・一部改変／第2表：信里・乗松2004からの引用、一部改変／第3表：信里・乗松2004からの引用／第4図：信里・乗松2004からの引用／第5～7図：横穴式石室の実測図は各古墳の報告書からの引用／第8図：信里・乗松2004からの引用、一部改変／第9～11図：横穴式石室の実測図は各古墳の報告書からの引用／第12図：中里原図

引用古墳文献

浦山4号墳：松本豊胤ほか1969『香川県文化財調査報告第10号 特集浦山古墳群調査概報』香川県教育委員会、渡部明夫・大山真充1977『岡の御堂古墳群発掘調査概報』綾南町教育委員会、信里芳紀・乗松真也2004「讃岐地域における後期古墳の階層構造～墳丘規模・内部主体・副葬品の検討を中心に～」『第9回中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集 中・後期古墳の階層構造』中国四国前方後円墳研究会／**王墓山古墳**：笹川龍一1992『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会／**岡田井4号墳**：信里芳紀・乗松真也2004「讃岐地域における後期古墳の階層構造～墳丘規模・内部主体・副葬品の検討を中心に～」『第9回中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集 中・後期古墳の階層構造』中国四国前方後円墳研究会／**岡の御堂1・2号墳**：渡部明夫・大山真充1977『岡の御堂古墳群発掘調査概報』綾南町教育委員会／**雄山7号墳**：松本和彦ほか2000『県道高松玉越坂出線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 雄山古墳群』香川県教育委員会ほか／**角塚古墳**：藤好史郎ほか1983「三豊郡大野原町所在の角塚古墳」『香川考古 創刊号』香川考古刊行会／**上母神4号墳**：真鍋昌宏1978『上母神第4号墳発掘調査報告書』上母神古墳群発掘調査団／**上母神8号墳**：久保田昇三1988『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 上母神8号墳（母神山古墳群）』観音寺市教育委員会／**川上古墳**：小林謙一・花谷浩編1991『川上古墳・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会／**菊塚古墳**：海邊博史ほか2003『菊塚古墳』『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8 菊塚古墳 三井遺跡』善通寺市教育委員会：海邊博史ほか2004『菊塚古墳』『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9 菊塚古墳 善通寺旧境内 善通寺陣所跡 旧連兵場遺跡』善通寺市教育委員会／**久米塚古墳**：久保田昇三1996『久米塚古墳発掘調査概要報告書』観音寺市教育委員会／**久米東塚古墳**：久保田昇三1997『観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 久米東塚古墳』観音寺市教育委員会／**黒島林1号墳**：観音寺市誌増補改訂版編集委員会1985「母神山古墳群」『観音寺市誌』観音寺市／**黒島林5・6号墳**：渡部明夫ほか1977『黒島林第5・6号墳調査報告』黒島林古墳群発掘調査報告／**黒島林7・8号墳**：斎藤賢一1982「黒島林7号・8号墳」『香川県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』香川県教育委員会／**末則1号墳**：渡部明夫1976『末則古墳調査概報』香川県教育委員会／**千尋神社4～6号墳**：松本豊胤ほか1973『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要 観音寺市文化財調査報告第3号』観音寺市教育委員会／**樋端2号墳**：片桐孝浩2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第43冊 樋端遺跡』香川県教育委員会ほか／**長砂古4号墳**：松浦隆1988「長砂古4号墳」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 石田遺跡 長砂古遺跡 佐田八丁遺跡』香川県教育委員会ほか／**母神山罐子塚古墳**：松本敏三1985「原始・古代編」『観音寺史談 通史編』観音寺市、信里芳紀・乗松真也2004「讃岐地域における後期古墳の階層構造～墳丘規模・内部主体・副葬品の検討を中心に～」『第9回中国四国前方後円墳研究会徳島大会発表要旨集 中・後期古墳の階層構造』中国四国前方後円墳研究会／**平塚古墳**：國木健司1995『香川の横穴式石室』『古代学協会四国支部第9回徳島大会資料 四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部／**原間4号墳**：片桐孝浩2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第42冊 原間遺跡II』香川県教育委員会ほか／**椀貸塚古墳**：國木健司1995『香川の横穴式石室』『古代学協会四国支部第9回徳島大会資料 四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部

香川県西部地域における後期古墳の階層性と鉄鏃 乗松真也・中里伸明

香川県内の長頸（ちょうけい）式出現以降の古墳出土鉄鏃について編年を行った。また、香川県西部地域に所在する母神山（はがみやま）古墳群とその周辺に展開する後期古墳に表された階層性について、副葬品組成、墳丘・主体部規模、横穴式石室の形態といった視点から整理した。さらに、階層性と鉄鏃との関係について検討し、上位階層の古墳には、新しいタイプの長頸式鉄鏃や特殊型式の鉄鏃が副葬される傾向がある点を指摘した。

States in Mounded Tombs of Late Phase and Iron Arrowheads in Western Area of Kagawa

By Shinya Norimatsu · Nobuaki Nakazato

Chronologically, we have filed the iron arrowheads unearthed from the mounded tombs after tyoukeishiki iron arrowheads were found in Kagawa. In addition, analysis have been conducted on composition of the grave goods burial, mounds and main burial facilities as well as the style of the corridor-style stone chamber to study on the states of the mounded tomb group in Hagamiyama and peripheral areas in Kagawa. We have also conducted research on the relations between the states of mounded tomb group and iron arrowheads and founded out that tyoukeishiki iron arrowheads and special design iron arrowheads were berried in the tombs on the top layers.

香川县西部地区后期古坟的阶层性及铁镳

乘松真也・中里伸明

我们针对香川县内出现长颈式铁镳之后的古坟出土铁镳进行了编年。另外，从陪葬品组成、坟丘和主体部的规模、横穴式石室的样式等方面，对香川县西部地区所在的母神山古坟群和周边后期古坟所显示的阶层性进行了研究。并且，我们就古坟的阶层性和铁镳之间的关系也进行了研究，发现上部阶层的古坟一般以新式长颈式铁镳和特殊样式的铁镳作为陪葬品。

가가와현 서부 지역에 있어서의 후기 고분의 계층성과 철촉 노리마츠 신야 · 나카사토 노부아키

가가와현내의 장경식 출현 이후의 고분 출토 철촉에 대해 편년을 실시했다. 또, 가가와현 서부 지역에 소재하는 하가미야마 고분군과 그 주변에 전개된 후기 고분에 나타내진 계층성에 대해서, 부장품 조성, 분구·주체부 규모, 횡혈식 석실의 형식이라고 하는 시점에서 정비했다. 게다가, 계층성과 철촉과의 관계에 대해 검토해, 상위 계층의 고분에는 새로운 타입의 장경식 철촉이나 특수 형식의 철촉이 부장되는 경향이 있는 점을 지적했다.